

しばらくの御無沙汰でした。長い間発行しないで申し訳ありません。お詫び申し上げます。

新年度になってしまいました。今後ともよろしく願います。(守谷)

■ 近況に代えて～仏様三題～

守谷英一

1 観音寺観音堂本尊千手観音像のこと

3月1日(土)に行われた史談会講演会・研修会の報告です。

時間・場所

3月1日(土) 午後1時30分から  
白鷹町中央公民館

講師

長坂一郎氏(東北芸術工科大学 教授)  
岡田 靖氏(東北芸術工科大学 講師)  
平吹利数氏(史談会副会長)

テーマは、2013年11月に行われた観音寺観音堂(深山観音堂)の本尊である千手観音像の放射性炭素年代測定の結果報告でした。

この像はいつの時代か火災により被害を受け、その後は「秘仏」として人の目に触れることなく堂奥にコモでくるまれて安置されていた。伝承によると、焼損前は一丈六尺の「立木観音像」であったということで、いつの時代に誰が作ったものか、どのような経緯で安置されたものだろうかということにはみんなが関心を持っていたことでした。



研修は平吹氏から観音堂の概略を説明していただいた後、岡田氏が放射線炭素年代測定の方法とその結果を説明、長坂氏が美術史から見た像の製作年代などについて説明してくださいました。

結論を簡単に記すと

- ①像の樹種は「ケヤキ」である。
- ②伐採されたのは900年～1050年頃。
- ③美術史的に判断すると製作年代は10世紀後半から11世紀前半頃。
- ④平安時代後期の神仏習合による「立木仏」像で、全国的に見てもその早い時期の遺品である。

ということでした。長坂先生からはこの像が山林仏教を背景にして作られているはずなので、信仰の対象となっている「山」はどこなのかという課題も提出されました。

2 鮎貝「相応院の文化財」展

「道智道を歩いてみた」のこと

4月13日(日)に「あゆむ」で行われた「相応院の文化財」展でのトークのことです。

この会は、本会の丸川二男会長と会員の江口儀雄さんが話し手でした。相応院を開いたといわれる道智は、14世紀中頃から15世紀半ばに活躍した人で、大井沢大日寺の中興の祖といわれている人です。応永年間(1394～1428)に飯豊町菺生から湯殿山にいたる湯殿山参詣道(「道智道」といわれる)を開いたことでも有名です。

白鷹町の仏像展⑤  
金剛道智開山・相応院の文化財

平成26年3月26日(水)～4月13日(日)  
9時～19時(3月は17時まで)  
休館日/毎週月曜日  
観覧料/一般200円(高校生以下無料)  
主催/白鷹町文化交流センター  
協力/相応院 東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター

【同時開催】梅津五郎通覧展2

白鷹町文化交流センター AYU:M  
〒992-0771 山形県西田郡白鷹町鮎貝7331番地  
TEL.0238-85-9071

本誌発行のお願い 編集費発生 西暦8年(1796)

その道は、白鷹町の鮎貝、黒鳴、日影の集落を経て、茎の峰から朝日町に入る道であるが、その道を昭和54年(1979)に実際に歩いた丸川さんと江口さんがその体験を話すことに

なっていました。

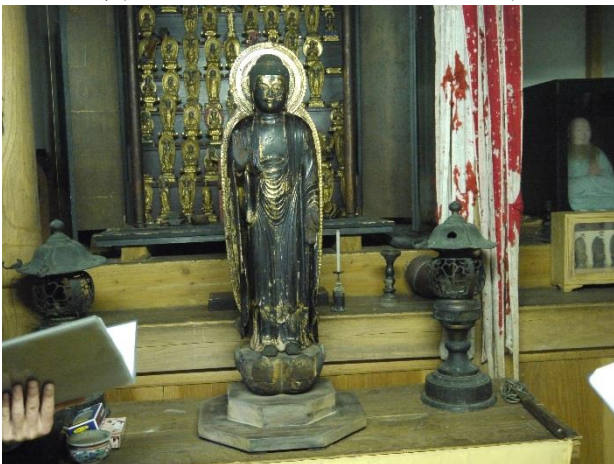
かつては大勢の参詣人で賑わったであろう道も、丸川さん、江口さんが「柳田国男を読む会」の会員のみなさんと歩いた頃はもうわかりにくくなっていたこと。また、実際に歩いてみると、記録されているよりも時間がかかったことなど、興味深い話を聞くことができました。

山道の多い道智道は、現在では辿ることが難しい状態になっているようです。けれども湯殿山や大日寺に関わるものは、相応院の文化財だけでなく、数多く白鷹町にも残されているようです。

### 3 塩田の行屋の「木造如来形立像」のこと

4月30日朝、町の教育委員会から10時に白鷹町の塩田の行屋に東北芸術工科大学で修復した仏像が納入されるとの連絡がありました。よろこんで見学させていただくことにしました。仏様は木造の釈迦如来像。修復にあたった岡田靖先生から詳しく修復の内容を教えてくださいました。修理の際にわかったことは

- ①放射性炭素年代調査、年輪年代測定の結果により、部材の伐採年代は1500年代末から1600年代初頭期ごろである。
- ②像に使われている樹種は「ヒノキ」である。
- ③技法構造的な見解も合わせて考えると室町時代の後期に作られたものではないか。
- ④像形から考えると、「釈迦如来像」ではなく「阿弥陀如来」かもしれない（両手先は後に補われたものであり、印相から釈迦如来とされてきたが、もともとは阿弥陀如来の印相だったのではないかとのこと）



1メートルにも満たない像ですがなかなか美しい像でした。

この像は、明治の廃仏毀釈にともなって湯殿山信仰の真言宗系の寺院よりもたらされたという伝承があります。その経緯を明らかにしてゆくことも、大切なこととおもいます。それにしても、現在保存している建物の傷みもあり、環境としては余り好ましくない状況でもあるよう

です。せっかく修理しても、また湿気のために傷んでしまいます。管理して下さっている方々は一生懸命なさっていただいているが、個人の好意に頼っているだけではどうにも仕方がないように思います。行政の力も必要でしょう。そういうことも含めて、文化財保存のあり方も考えさせられました。

## ■ 「北土」探索

丸川二男

戦後の昭和二十二年八月、横山七郎、荒川畠一らは「民族詩懇話会」という文芸グループを作り、詩と短歌の「民族詩」という冊子を発行していた。このグループは八年間の活動期間で三十四号の冊子を作り、二十九年三月に解散していることが他の資料からわかっているが、今のところ現物は確認されていない。

その後、このグループは間もなく横山七郎を中心とする詩の「ガラス」と、荒川畠一を中心とした短歌のグループに分かれている。前者は後に置賜詩人会と合流して「索座」、「らんる」と名を変え、蒲生直英、相馬好衛らが参加している。一方、後者は大宮昭一、佐藤隆、加藤木実、守谷恒子などの仲間を加えて「北土短歌会」として活動し、「北土」という名の会誌を出すことになる。そのいきさつを荒川は創刊号の巻頭に「——啓蒙的任務は一応果し得た事実を認め、解体を決意し——」と記し、初期の目的を達したことによる発展的解消である強調している。この会はその後四十年に及ぶ活動を続け、百号をもって終刊号としたのは平成六年の一月であった。

その「北土」がどこで、どういう状態になっているかが気になっていた。

町の図書館に揃っているとばかり思っていたが、全号揃っていないだけでなく、残りがどこにあるかわからないという。こうなると役場の中は人が変わったり、置く場所を変えたりしているうちに廃棄されたり、どこにいったかがわからなくなるのが常である。以前、図書館に関係していた人に聞いたりしてあちこち探してもらったがなかなかわからなかった。そうしているうち、かつて亡くなった人から貰い受けた資料がダンボールに入ったまま旧中山小学校にあり、その中に紛れ込んでいるかもしれないということが耳に入ってきた。

役場の担当者に事情を説明して、時間を作ってどうなっているか確かめてほしいとお願いしたところ、この四月の二十日を過ぎて「見つけてきた」と連絡があったのである。早速、現物を見せてもらいにいったら全百号の内、中間の

十七号から三十一号までと、三十四号が抜けているものの、それ以外は紐で綴じられていた。

まずはやれやれという感じである。初期のものは当然ガリ版印刷であり、途中からタイプ、さらにオフセットに変わるが、初期の表紙がカラーで刷られているのが目を引く。また、題字である「北土」の「土」の右肩に活字にはない「点」がついているが、これは何を意味しているのだろう。（土の異体字のようです。守谷）



パラパラとめくっただけでも、個々の作品だけでなく、あとがきや途中に書かれている小さな記事にもいろいろな情報がかくれていて興味深いものがある。何はともあれ、少し先が見えてきた気がするのだが、残りを誰が持っているか、さらに保存をどうするかなど、課題も多い。関連する他の資料も同様だが、必要な時に誰でも見られるようにしておかなければ宝の持ち腐れになってしまうだろう。

こうしたことは「歴史的資料の収集と保存」という形に集約されるが、その内容となると広範囲に及び、あれこれ議論が進まぬうちに過去の資料が散逸、廃棄されていくというのが現状である。このことは今後いっそう深刻化するとみられだけに、なんとか早くに大まかな指針を作り、できることから着手することが必要ではあるまいか。

今回気がついたことのひとつに、現在編まれている『白鷹町史』の現代編が、取り扱う時代



区分を町村合併以降としたため、敗戦後の各村

の資料に目が向けられなかったということがある。戦後の十年間は諸制度が新たに発足しただけでなく、それ自体が激しく変化した時代である。戦前には無かった文化活動も官民を問わずつぎつぎと起こっては消えていった時代でもある。それだけに昭和二十年代の公文書、私的なメモや写真、文字情報以外の伝承や衣食住に関する風俗・習慣にいたるまで、もっと注意を払うことが必要であり、そうした中のひとつに「北土」もあったということになるだろうか。余談になるが、「北土」の八十号を記念して大宮昭一が「北土歌集」として『辛夷』を編んでいる。

この「北土」の中で気になるのは、やはりグループの中心メンバーであった荒川畊一である。『白鷹町史』の編纂やこの地域の歴史・文化財に関わる仕事で評価されてきた人だが、若い時から農業を続けながら短歌を作ってきた農民歌人でもある。その作品の数はこの「北土」に限っても、仮に一回に十首発表したとすれば千首を数えようが、彼の場合は昭和の初期から短歌雑誌に投稿しており、入選や佳作に選ばれた作品の載った冊子が今も生家に残っている。しかもそれらのほとんどが未整理のまま眠っているだけに、今後はそれらの作品を中心にすえた調査・研究が待たれるところである。

下は「北土」の十五号の一部である。右のペ



ージには荒川の自選の短歌が十首ならべてあり、その上には証明用の写真を直接貼り付けている。この時分、このあたりではまだ写真の印刷が容易でなかったせいだろうか。同時に「歌会」を開催しても出席できない人が多く、会員同士が顔を合わせる機会のないことから苦肉の方法だったことが末尾のあとがきからうかがわれる。それにしてもそれぞれが仕事や家庭も持ち、環境としてはきびしいものがあつたはずだが、会員の創作意欲は相当なもので、五首、十首と休

むことなく作品を作り続けていたのである。当時から比べればはるかに豊かで恵まれているとされる昨今、我々の周囲にこの種のものが見当たらないのはどういうわけだろうか。改めて考えてみるべき事柄であるに違いない。

## ■ 撚糸屋さん訪問記

守谷英一

「撚糸屋さん」といってもすぐにどのようなものか思い浮かぶ人も多くはないだろう。わたしも同様だった。織物について勉強し始めて出会ったことばの1つである。それまでは何も知らなかった。

「撚糸（ねんし）」とは糸に撚り（より）をかけること、または撚りをかけた糸のことで、「撚る（よる）」とはねじりあわせること。「腕によりをかける」とか、「よりを戻す」という言葉はここからでたということである。なぜ撚糸ということが必要かという、かいつまんで生糸。繭からほぐし出した糸はとても細く、そのままでは糸としては使えないので、何本かを束にしなないといけないのだが、そのままの束では、ばらばらになって扱いにくくなる。そこで、この生糸の束に軽く撚りをかけると、丈夫な一本の糸として使えるようになるというわけなのである（以上「日本撚糸工業組合連合会」のHPを参考にした）。

簡単に言えば、繭から取った生糸を布を織る糸にする作業が「撚糸」であり、それをする仕事が「撚糸屋さん」ということになる。

織る織物によって、撚りの強さが違う。また、機屋さんによって撚りの好みが違う。そのようなわけで、機織りの盛んな時期にはこの字地域にも何軒かの撚糸屋さんがあった。

昨年12月に長井紬の理事長さんである斎藤織物の齋藤俊弘さんを訪問したとき、長井、白鷹地区には「撚糸屋さん」が1軒しかなくなつたと聞かされた。生糸が輸入品になり、しかも各種の撚りの強さの糸が買えるようになった。撚糸屋さんに依頼するより安くつく。そんなわけで、撚糸屋さんはなくなりつつある仕事だという。

いつか訪問して話を聞きたいと思っていた。思い立ってその長井市新町の「牛谷撚糸加工所」に電話をしたのが5月30日のことである。電話をすると、今撚糸をしているからすぐ来られるかとのこと。昼近くだったので午後からでもよいかというと、午後では終わってしまうといわれ、慌てて車を走らせる。

撚糸の作業をしているのは牛谷富雄さん。昭和31年生まれだから私よりも4歳ほど若い。18の時から仕事をしているという。

「牛谷撚糸加工所」は、昭和23年（1948）に富雄さんのおじいさんが始めたものだという。最初は農業の冬仕事の副業として、次第に注文が多くなると専業となり、織物産業の最盛期には10名を越す人が働いていた。

長井、白鷹地区の織物は「水より」という撚糸方法を使う。それが特色になっている。けれども今はほとんど仕事がない。最盛期には1社で100キログラムを越す注文があったけれども、今日しているのは5キログラム。それもたまの仕事だという。



使っているのは「長谷式コロ取撚糸機」で、30日は緯糸（よこいと）にする糸を撚っていた。

機械もずいぶん使い込まれている。壊れると大変だという。また糸を巻いている管も使っているうちにすり減る。なくなってしまうと補充が付かない。いい話は何も聞けなかった。

外から見ると一つ一つの仕事の貴重さを感じる。そして、その貴重さを取り立てて論じようとする。けれども、当事者にとっては何よりも「経済」の話である。糸の値段が円安によって1.6倍になってしまった、その差額をどう吸収しようかと織屋さんでは困っていると齋藤さんは話してくれた。地元の企業を使うことは仕事を伝承してゆく上では大切だ、しかしそのことは経済的な「リスク」を背負う。民俗学者の田口洋美は、そのようなリスクを「文化伝承リスク」と名付けたが、それを考えずにはいらなかった。なくなることは仕方がないのか、何か方法はあるのか、厳しい現実には私達は向かい合わなければならない。

## ■ お知らせ

「置賜民俗学会50周年記念事業 研究集会」  
平成26年6月29日（日）  
午後2時から4時30分まで  
場所 アクティー米沢（米沢市大町1-5-5）  
参加費500円 詳細は守谷まで